

中国・満州を教材にした総合的な学習の時間の実践を通して

前大連日本人学校 教諭

埼玉県さいたま市立沼影小学校 教諭 品田 大介

キーワード：歴史認識，国際理解，大連，戦争と平和

1. はじめに

中国，大連は飛行機で成田から3時間程度の距離であり，過去の歴史においても日本と深い関わりのある都市である。日本人には馴染みの少ない都市であるにも関わらず，北朝鮮との国境である遼寧省に位置し，北朝鮮や韓国との歴史的な関わりは深い。日本で知られている中国の都市としては，首都であり2008年夏季オリンピックの開催地である北京，2010年の万博開催であり，話題になっている上海を始めとして数多く挙げることができる。大連も日清・日露戦争を始めとする近代史においては，「満州国」として，日本と深い関係を有しており，戦争を体験した世代の人々には忘れられない都市となっている。

総合的な学習の時間や社会科の実践において，現地教材を活用することは児童の主体的な活動や理解を促し，興味・関心を高めやすい。小学校第6学年の社会科における近代史の扱いでは，日清・日露戦争を扱うものの，歴史的な事象を掘り下げ，そこで生きた人々の思いを児童が理解することは難しい。「大連」という地域の特性を生かし，社会科と総合的な学習の時間の関連を図りながら，児童の歴史認識を育むことができればと考え，実践に取り組んだ。

2. 大連日本人学校と子どもたち

第6学年では，社会科や総合的な学習の時間に限らず，国語科においても広島原爆ドームを学びながら，「世界の平和」について考え，平和の願いを深めていく。小学6年生という貴重な時間を中国，大連で過ごした子どもたちがその経験を生かし，日中の架け橋となり，世界平和を担う存在になってほしいと思う。そのためには，より深く歴史的な事象を扱い，「戦争」には平和を願う人々の思いや家族を思う人々の思い，国家を思う人々の思い等，様々な思いが交錯していたことを知り，主観的な歴史認識と客観的な歴史認識を深めることが，日本と中国の友好関係を深める第一歩と考える。

また，大連日本人学校では，在外教育施設でありながらも，新学習指導要領を意識した「表現力の向上」や「言語活動の充実」に研修として取り組んだ。社会科や総合的な学習の時間においても，自分の考えを小グループで発表し，グループの考えを学級全体へと広げていく「交流学习」を通して，意識的に取り組むことを課題として設定した。総合的な学習の時間においては，「西安・大連・日本～私たちがつなぐ大切な絆～」をテーマに1年間学習に取り組んだ。この実践の様子や考察について，以下に述べる。

3. 研究の実践と考察

(1) 西安修学旅行を通して

第6学年では，6月に中学部2年生と合同で西安に修学旅行を行う。西安は，古代史において日本と関わりが深い地域であり，秦の始皇帝陵や兵馬俑，隋・唐時代の史跡等，数多くの史跡に囲まれた地域である。2泊3日の旅行において，子どもたちは中国の壮大な歴史に触れ，日本と中国の深いつながりについて知り，歴史に対して多くの関心を抱いた。4月から始まった歴史学習であるが，実際に訪れ，触れ，感じるにより，児童の興味・関心に広がりが見られた。

(2) 現地校との交流会，研究授業「3人の武将と全国統一」

総合的な学習の時間では、修学旅行の報告と並行しながら現地校との交流を行っていった。今を生きている子どもたちにとって、過去の歴史を学びながら平和な未来を願っていく中で、現地校との交流はとても大切である。第6学年では、1学期は主にスポーツを通して交流を行った。一緒に体を動かしながら、同じ年齢の子どもたちと関わることは、2学期に行われる運動会での合同種目や「戦争」について学んでいく中でもとても大切な経験となった。

また社会科では、「表現力の向上」を目指して研究授業に取り組んだ。調べ学習を通して、興味をもった武将について調べ、小グループで発表を行いながら、その武将の優れたところを発表する形式で取り組んだ。資料を読み取ったり調べ学習に取り組んだりする中で、子どもたちは自分の考えを友達に伝えることの大切さに気付くことができた。

(3) 学習発表会に向けて

大連日本人学校では、11月に学習発表会が行われる。この発表会に向け、子どもたちと話し合い、テーマを4つに絞った。社会科見学で訪れた「旅順平和学習」、同じく「満鉄陳列館」、総合的な学習の時間で取り組んだ「中日友好学友会の王先生の授業」、同じく「遼寧師範大学の学生との交流」である。この4つの学習を中心に「戦争の悲惨さ」と「平和の大切さ」について自分たちの言葉で伝えることに決めた。その活動の様子を以下にまとめる。

①旅順平和学習

10月に過去の戦争について理解を深めるため、日露戦争において実際に戦地となった旅順を訪れた。主な見学場所は、東鶏冠山や日露戦争陳列館、望台砲台や203高地、水師営会見所である。現地ガイドの方から説明を受けながら、子どもたちの心に深く印象に残ったのは、乃木希典將軍の作戦や戦争によって苦しんだ人々、そして、当時の人々の戦争に対する思いだった。203高地を駆けあがるときの兵士の思い、日本とロシアの戦争に巻き込まれた現地の中国の人々の思い、そして、203高地から見た旅順港の風景などである。今、自然に溢れる203高地が、当時は全く木がなかったことを知り、過去の戦争に思いを馳せることができた。その様子を子どもたちは、劇にし、作文や詩にまとめた。次の詩は、旅順平和学習で感じた思いを表わしたものである。

「戦争 : 戦争が奪うもの 家 家族 平和な暮らし 戦争が与えるもの 悲しみ 苦しみ 残酷な現実 死
戦争 それは 二度とあってはいけないこと そのために平和を守り抜いていこう」

実際の戦地を訪れ、自分の祖父や祖母が中国で戦争を行っていたことを知り、広島や長崎とは違う戦争への思いを子どもたちは感じる事ができた。「日本はひどいことをした」という悲観的な思いだけではなく、歴史に真っ直ぐに向き合うことで、子どもたちは「どうして戦争が起きたのだろうか？」という疑問をもつことができた。この思いを中日友好学友会の王先生にうかがった。

②中日友好学友会「王先生の授業」

旅順平和学習を前後して、中日友好学友会という団体の王先生に授業を行っていただいた。王先生は70歳を超えらるご高齢にもかかわらず、子どもたちにたくさんのお話をしてくださった。旅順を訪れる前は、ただ話を聞いていた子どもたちも、2回目の授業の際には、王先生にたくさん質問をすることができた。



資料①～203高地から旅順港を臨む

子どもたちが王先生から学んだこととして、

・戦争には理由があった。

(ロシアは不凍港がほしかった。日本は植民地がほしかった。)

・戦争には悲しい話がたくさんあり、たくさんの物語がある。

などが中心にあげられた。王先生のお話の中に日本兵がロシアの陣地にタバコを投げ、それに対してロシア兵が日本の陣地に缶詰を投げ返すというものがあり、悲しい戦争が続く中でもその瞬間だけは「人を思いやる気持ちが生まれた」という部分に、子どもたちは大変興味を抱いていた。そして王先生は最後に子どもたちにいくつかのメッセージを残してくださった。この授業のあと、子どもたちは次のような感想を残している。

「小学6年生の今を大連で過ごした私たちが、大人になったとき、ここ大連に戻り、いろいろなことを感じたい。」

この文章を受け、保護者の方が、発表会後の感想で、

「小学6年生の大切な時期をここ大連で過ごすことができ本当によかった。」と書かれていた。子どもたちだけでなく、保護者の方にも深く印象に残る授業となった。



資料②王先生の授業

③満鉄陳列館の見学

旅順平和学習、王先生の授業を経験した子どもたちは、続いて大連にある「満鉄陳列館（旧南満州鉄道本社）」を訪れた。ここでは、この施設を管理するJALの方から当時の様子について教えていただいた。それは、日本人が満州へと移り住んでいく経緯であったり、当時の都市計画の様子であったりした。ここで子どもたちが興味をもったのは、「戦争の光と影」のような部分であった。それは、大連という都市が戦争を通して発展したということ、一方でそれを中国の、大連の人々が必ずしも望んでいなかったということ、そんな歴史の中でも中国の人の中で尊敬される日本人「小日山直登」という満鉄の総裁がいるということ、そして教科書に出てくる「杉原千畝」という人の存在、また韓国には「浅川巧」という人がいるということなどである。そしてこの見学を通して、子どもたちは、「歴史を鑑として未来に繋げる」という言葉の意味を考えるようになった。ここでの子どもたちの感想は、「当たり前だと思っていた平和。でもほんの少し前までは人は戦って死んでいった。こんな人を二度と出さないために、ほくに何ができるのか考えたい。」というものであった。この学習を受け、子どもたちは質問をまとめ、遼寧師範大学の学生と交流を行い、自分たちに何ができるのか、考えることになる。

④遼寧師範大学の学生との交流

遼寧師範大学日語日文学科の学生との交流は、4年目を迎えており、3年生と6年生が行っている。3年生は、総合的な学習の時間で興味をもった中国のことについて質問する時間を多く設けている。一方6年生では、これまでの学習を振り返り、戦争や平和についての質問が集中した。子どもたちの質問で多かったことは、

- ・戦争とは何か。
- ・なぜ戦争が起こるのだと思うか。
- ・戦争の中で一番許せないことは何か。
- ・平和を維持するにはどうしたらよいか。
- ・平和とは何か。
- ・これから平和のためにどんなことをしていきたいか。

などであった。これに対し、遼寧師範大学の学生が日本語でとても丁寧に答えてくれていた。そして、話し合う時間だけでなく、その後一緒に食事をしたりスポーツをしたりして交流を深めることができた。子どもたちの感想には、「日本は、戦争中にひどいことをしたけれども、今の日本を『好きだ』と言っていた。『今は関係ない』と言ってくれた。『今は平和であり、みんな友達だ』という言葉が印象的だった。」というものがある。この交流を通し、

子どもたちは、自分たちにできることを考え始めた。

4. 研究の成果と今後の課題

子どもたちは、歴史に触れた西安修学旅行や、現地校との交流会、「戦争の悲惨さ」と「平和の大切さ」をテーマに取り組んだ学習発表会といった1年間の総合的な学習の時間に主体的に取り組むことができた。学習発表会や3学期にまとめた総合的な学習の時間の記録では、以下のような詩や感想が述べられている。

「希望の光： もし今戦争があつて悲しかったら 希望のない明日はもっと悲しい
もし今平和で楽しい今があつたら 希望のある明日はもっと楽しい
希望の光を見つけよう もっと楽しい明日があるから」

「『平和を求めるための戦争』『自分を守るための戦争』『欲のための戦争』。戦争に理由はいらぬ。これから生まれてくる命、小さな命のためにやるべきことがある。」

「戦争を起こすのは人の心。だから人の心が平和をつくることもできる。」

「自分を守るものは武器ではない。みんなが戦争をしたくないという思いでつながること、平和を大切に思う気持ちでつながることが、自分を守る武器になる。」

子どもたちは、学習発表会の最後に「HEIWAの鐘」という歌を歌い、「私たちがつなぐ絆が、平和の鐘を人々の心に鳴らし続けることを信じ、今日の発表を終わります。」と締めくくった。12歳という年齢ながらも、中国大連で生活した経験のある日本人として、今後の日本と中国のあり方について考えを深め、今の自分を振り返ることができた。この子どもたちが「これからの未来」についてもしっかりと考えることができると感じる。

5. おわりに

歴史が好きな私が、中国で人に触れ、歴史に触れ、文化に触れることができたことは、本当に貴重な経験となった。学習発表会で私が一番こだわったことは、「役割演技をしない」ということである。これは、様々な考え方があろうと思うが、当時の兵士を演じるのではなく、当時の国民を演じるのではなく、あくまでも「等身大の子どもたちが語る」という設定で取り組んだことである。これは、私自身が韓国へ留学した経験があり、戦争を語る際には、「ぼく（私）は～思う。」という気持ちで取り組んだ結果である。子どもたちは、戦争を「自分と関係のあるもの」と感じることができ、「今もそしてこれからも自分に関係のあるもの」として捉えることができた。

国際理解は、「その国について知る」ということだけでなく、「その国というフィルターを通して、日本という国を知る。」ことだと思う。子どもたちは、「中国の歴史」というフィルターを通して、「日本の歴史」について深く考えることができたと思う。

家族とともに2年間中国、大連に派遣させていただき、たくさんのことを学ばせていただいたことは、何よりも得難い体験となった。最後に、派遣にあたり、文部科学省、国際教育センターの方々並びに埼玉県、さいたま市の教育委員会等の方々、大連でお世話になった皆様方に深く感謝申し上げたい。